

## Café des open



## 三浦一族

Menu 第13回  
畠山重忠の乱と  
三浦一族

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

鎌倉幕府を開いた源頼朝が没した後、幕府内では御家人同士の他氏排斥が激しくなり、梶原景時や比企能景らが討たれ、さらに元久2年（1205）6月には武蔵国の御家人畠山重忠が追討されました（畠山重忠の乱）。

この重忠の乱の直接のきっかけは、乱が起きる8か月前に遡ります。前年10月、源実朝の婚姻につき、その正室として公家坊門信清の娘を迎え入れるため、幕府の使節が上洛します。そのなかに、北条時政と妻牧の方との間に生まれた北条政範（まさのり）がいました。政範は、使節の一員として上洛しますが、その在京中、わずか16歳の若さで亡くなってしまいます。息子が亡くなり悲嘆にくれる母牧の方のもとに、娘婿の平賀朝雅から重忠の子の重保を讒言（さんげん）する話をもたらされます。政範とともに上洛中だった重保と当時京都守護で在京していた朝雅が酒宴の場で激しい口論となり、その後、朝雅は牧の方に重保の讒言を行ったのです。実は、牧の方の夫の時政と重忠は武蔵国の支配をめぐり対立していました。武蔵国は将軍家の知行国の1つで相模国と並んで幕府を支える地域であったため、時政にとって、武蔵国を押さえることは大変重要な意味をもちました。もともと武蔵国の国司は娘婿の朝雅がつとめていましたが、彼が京都守護として在京したため、代わりにその国務を代行したのが義父時政でした。一方、畠山氏は武蔵国の棟梁格の武士で、同国の留守所惣検校職（るすどころそうけんぎょうしき）を務めた実力者であったため、両者の利害は対立しました。そうした対立があるところに、朝雅から牧の方に重保への讒言がなされたため、畠山氏は謀反の疑いがかけられ、討伐されることとなったのです。

しかし、父時政から重忠追討の命を受けた北条義時・時房兄弟はこれに反対します。重忠は、源平合戦の頃から忠義を果たしてきた人物で謀反の企てなどあるはずなく、真偽を確認してからでもよいのではないかと時政に詰め寄りますが、牧の方より、すでに重忠の謀反は露見しており、それに反対するということは継母を讒言人にするものだと言われ、結局義時はこれに従い、重忠追討にあたります。元久2年6月20日、親戚の稲毛重成に武蔵国から鎌倉に招き寄せられた重保は、同22日、鎌倉で騒動があったとの知らせを聞き、郎従を従え由比ガ浜に駆け付けます。しかし、そこには幕府から命を受けた三浦義村がおり、謀られた重保らは義村の軍勢に取り囲まれ、主従ともども殺害

されました。一方、重忠も武蔵国から鎌倉に向かっているとのお知らせがあり、道中で重忠を殺害するよう沙汰があったため、義時らの軍勢が出陣し、義村や弟の胤義、和田義盛ら三浦一族の軍勢もこれに加わりました。重忠は武蔵国二俣川付近にやってきたところ、幕府勢と遭遇し



畠山重保の墓（鎌倉市）

攻撃を受け、討ち取られました。しかし、この時、重忠の親戚縁者のほとんどは他所におり、その軍勢も小勢であったことから謀反の疑いなどないことは明らかでした。こうした状況が明らかになると、その批判の矛先は北条氏に向けられます。その批判を時政夫妻に向けするため、北条政子と義時は、畠山父子を鎌倉に誘い出した稲毛重成とその兄弟らを首謀者に仕立て上げ、義村を使って彼らを誅殺しました。

このように、三浦一族は一連の重忠討伐に積極的に関与していました。では、何故、三浦一族はそこまで重忠討伐に積極的だったのでしょうか。重忠の母は、三浦義明の娘で、重忠は義明の孫にあたります。にもかかわらず、衣笠合戦で、重忠は一族統合の象徴といふべき祖父義明を攻め、死に追い込みました。これは、姻族と軍事行動を共にすることが多かった当時の東国武士社会の倫理に反するもので、三浦一族にとっては看過できず、その怨念は決して消えるものではありませんでした。重忠が平家方から離れ頼朝に帰順した際、頼朝は三浦一族に遺恨を残さぬように説得し、一族も頼朝存命中はこれに従っていました。しかし、頼朝の没後、その遺恨は再燃することとなり、重忠は一族の怨念のターゲットとなっていきます。一族の惣領たる義村が積極的に重忠討伐に関わっていった背景には、このようなことがあったと考えられています。

参考文献：野口実「鎌倉武士の心性—畠山重忠と三浦一族」（五味文彦・馬淵和雄『中世都市鎌倉の実像と境界』、高志書院、2004年）、山本みなみ『史伝北条義時』（小学館、2021年）